



# ¡MÉXICO MÁXICO!

メヒコ マヒコ - 魅惑の国メキシコ - Dic. 2017



【Vol.4】先住民の伝統食グサーノ料理

話のネタとしては鉄板？



## メキシコの高級珍味、虫料理

メキシコ在住者として、いつか挑戦しようと思いつきながらもなかなか決心がつかなかったグサーノ (Gusano:イモ虫) 料理をいただける機会を得ましたのでレポートします。虫料理といえば、高タンパク&高ミネラルな栄養食材として国連食糧農業機関 (FAO) でも以前から推奨していますが、メキシコでは先コロンブス期より常食されてきた身近な食べ物。日本もイナゴを食べる文化があるので親近感が湧きます。

すでにチャプリネス (Chaplines:バッタ) でメキシコの昆虫食デビューは果たしており、ビギナーではないという自負のもと今回のグサーノに挑みましたが、いざ目の前にするとそのフォルムに騒いでしまい、フリホーレス (Frijoles:インゲン豆ペースト) やワカモーレ (Guacamole:アボガドペースト) と一緒にトルティーヤに包んでごまかし

ながら 5 匹ほど食べるのが精一杯。不本意ながら、奥深い味を理解するまでには至りませんでした。気になるお味は、ニンニクを効かせた塩味で、素揚げされているので中身までカリカリ、「スナック感覚だよ」(友人談)とのことです。

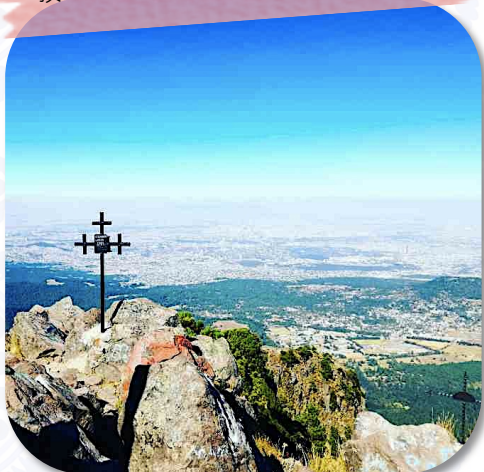
テイクアウトしたお店の店員さんによれば、メキシコではグサーノ・ブランコ (Gusano Blanco:白イモ虫) よりもグサーノ・ロホ (Gusano Rojo:赤イモ虫) のほうがメスカール酒 (Mezcal:リュウゼツランの蒸留酒) で馴染みがあるので一般的。ですが、節足がついていたりとブランコに比べて虫感が強く、お値段も倍以上します。

わたしが次にグサーノを食べるのは世界的な食糧難のときだと確信していますが、コヨアカン地区では 2 軒、先コロンブス期の伝統料理を味わえるレストランがあります。グサーノの他にも、エスカモーレ (Escamoles:蟻の卵) やアウアウトレ (Ahuautle:ハエの卵)、サソリ (Escorpión) などの高級珍味が一皿 (350g) 400MXN (約 2,800 円) 程度で楽しめるので、メキシコのディープな昆虫食の世界に足を踏み入れてみるのも、新たな味覚に出会えるチャンスかもしれません。



大好きなチチャロン(豚皮揚げ)

頂上からの眺望、霞むシティに驚愕



## メキシコで初登山&シティの大気汚染

先日、日墨研修生有志からなる登山部メンバーとメキシコ人ガイドさんと一緒にシティ郊外のアフスコ山 (Cerro Ajusco) に登ってきました。

小山 (Cerro) と言えどもメキシコで 9 番目に高い山、標高は 3,939m で富士山を超えます。日本でも木曾駒ヶ岳などの中央アルプスをはじめ、気の向くままに浅いトレッキングを経験していましたが、過去に富士登山で高山病にかかったことが。加えて、今回の渡墨で登山靴を持ってきていなかったため、無謀にもスニーカーで参加してきました。

当日は風が強く、日本のように登山道も整備されていないので、完全防寒でひたすら道なき道を邁進。9月の地震の影響で土砂崩れも多数ありました。

やっと辿り着いた山頂では、メキシコ人の若者達となぜかセルフイを撮ったあと、部長のサプライズ差入れ、日本米おにぎり(梅干し入)&渋い日本茶でほっと一息。久しぶりの日本食、かつ山頂でいただく状況に、大いに心満たされました。

山頂からシティを一望すると、衝撃的な大気汚染具合。なんとシティ上空だけ茶色い雲の層が。1年間、あの中で生活するのかと思うと、老後の癌が心配なところ。とはいっても、山頂からはシティの埋め立て地としての地理的様子がよくわかるので景色として大変に興味深いです。

今回幸運にもケガなく、高山病もほぼなく下山できましたが、登山部の最終目標は、標高4位の山ネバド・デ・トルーカ(Nevado de Toluca / 4,690m)への登頂なので、登山靴をどこかで調達し、トレーニングしようと思っています。せっかくなのでアステカ神話で有名な3位のイスタクシワトル山(Iztaccíhuatl / 5,230m)と2位のポボカテペトル山(Popocatepetl / 5,426m)へも途中までいいので登れたらと思案中です。

¡Dios mío!(オーマイゴッド)なクラス



## 今年の CEPE クラス終了

今期のスペイン語クラスは13人中11人が女性(うち8人がアジア人)という稀な比率で、先生もつい「Chicas~(女の子達!)」と呼び掛けてしまうほど女子クラスの雰囲気がある、とても賑やかなクラスでした。

毎日出されるプリントやエッセイの宿題は、やらないと授業についていけないので、もはや強迫観念で取り組んでいましたが、授業は先生の個性が光る進行のもと、クラスメイトと「Tonta~♡(おバカさん♡)」とふざけ合いながら助け合った1ヶ月半でした。

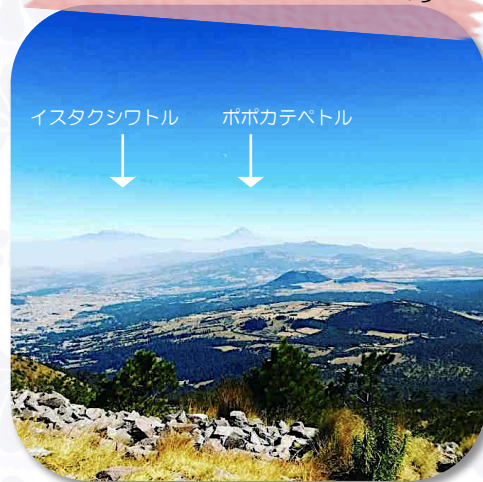
クラスの最終プレゼンも無事に終え、テスト期間中はオール・テストや筆記テスト、SIELE(メキシコ版スペイン語統一テスト)が終わるたびに自然と集まり、一喜一憂しながら励まし合いました。こうした会話をストレスなく、すべてスペイン語で交わせるようになったことが嬉しいです。クラスメイト達は、これからメキシコ国内の旅にでる人や、キューバでクリスマス休暇を過ごす人、母国に帰国する人、南アメリカ大陸一周の旅に出る人など様々ですが、別れ際の挨拶「¡Nos vemos (また会おうね)！」がいつか地球のどこかで実現できたら嬉しいです。

## メキシコのディプロマ事情

日本では、学位を取得するために通常2~4年程度のまとまった年数が必要ですが、メキシコではサバティーノ(Sabatino:土曜日だけの集中講義)といったコースで社会人が働きながら学位を取れる環境が充実しています。

アート系の場合、ほかにも大学や美術館などで〈Académica Complementaria〉や〈Educación Continua〉という名で数日~数ヶ月程度の集中クラスが開講されており、メキシコの研究機関はアカデミックな勉強を継続したい人のために常に門戸を開いている印象です。受講するには、登録期間内にポートフォリオの提出や面接をパスする必要があり、普通の授業でも出席率やプレゼン、最終テストなどの評価が日本に比べて遥かに厳しい基準ですが、短期間で集中的に勉強ができて学位まで取れる点は日本にはないメリット。研修も1/3が過ぎつつあるので、こうした制度を利用して自分の専門分野を深めていきたいと考えています。

二大お山の裾野も霞んで風流です



ニケ像は世界共通@UNAM 芸術学部

